PROJECT

オセアニアの紛争研究事始め

文・写真
丹羽典生

共同研究 ● オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究（2009-2012）

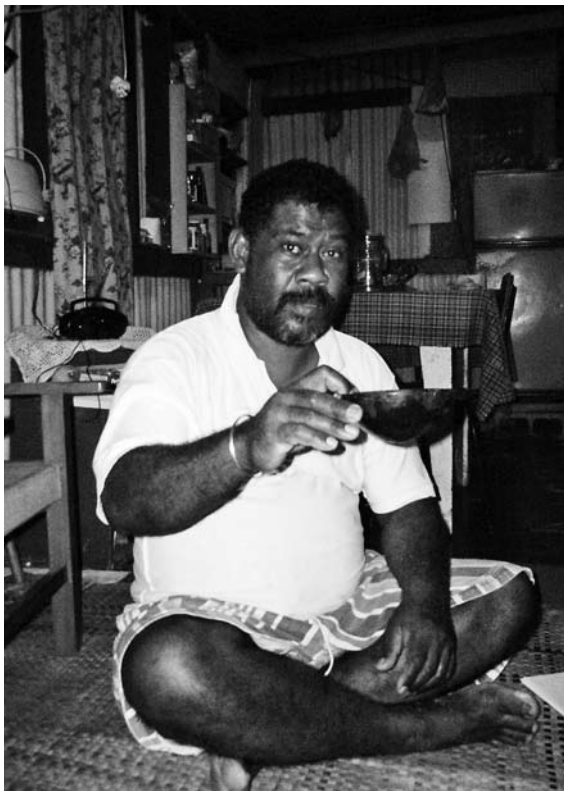
オセアニア現代を紛争から考える

本共同研究ではオセアニアにおいて比較的近年起きている紛争を総括的に扱うことを目的としている。オセアニアの紛争というと怪訝な顔をされる方もいるのではないだろうか。穏やかで美しい自然環境にめぐまれた地域であるし、対話やコンセンサスを重視する物事の処理の仕方をパシフィック・ウェイ（オセアニアのやり方）として理念化する有力政治家までいる地域で、世俗の血なまぐさい争いのイメージは、別世界の出来事と思われても不思議はない。

そもそも紛争という研究課題に関心を抱いたのは、個人的な体験に基づいている。まだ大学院生時代、初めての海外調査を敢行する直前の2000年5月19日、長期滞在に向けて緊張しつつも準備を重ねていたわたしは、当時所属していた東京都立大学の松園万亀雄先生に部屋に呼び出され、フィジーにおけるクーデタ発生のニュースを教えられて、一瞬頭が真っ白になったことを覚えている。日本を出発する数日前のことであった。

その後、事態の沈静化を待って2000年8月からフィジーでの調査滞在を始めたが、クーデタ直後のフィジーでの日々において、村落部の調査に集中していたとはいえ、政治的な動向が頭からはなれることはなかった。それは、主要幹線道路のそこかしこにあった検問所で、軍人が銃を構えているという日常的光景の一齣が、クーデタや都市暴動の巻き起こした混乱から完全に回復していないフィジーの置かれた政治的状況の緊張度を思い起こさせたからばかりではない。実際、クーデタの悪夢がさめるまもなく、国の根幹をなす憲法それ自体の正統性が日々裁判で争われていたのみならず、総選挙に向けたキャンペーン演説では民族差別的な言辞がヒートアップすることもしばしばあり、普段とはまた異なる生々しい、あるいはあけすけな人びとの声を直接耳にしたからでもある。

しかし同時に、村での生活のある種の変わりのなさにも強い印象を受けた。クーデタの結果、職をなくした人も村の中には数名いたが、都市部ならいざ知らず農村部では限られていたし、土地所有者であるフィジー人にとって口を糊する程度の小規模な農地は手軽に入手でき、濃密な人間関係に囲まれた農村での生活は互助を通じて最低限のセイフティーネットを提供していた。また、そもそも職を失った彼らにしても、以前から不安定な雇用形態におかれていたため、生活の困難の原因を一義的にクーデタに結びつける人ばかりではなかった。むしろ伝統的飲料であるカヴァを囲む席で交わされる切迫感のともなった噂話の語り口や、話題の種類（クーデタ関与者のゴシップ、事態の進展に関する真偽の定かでない裏話）などを含めた張りつめた雰囲気に、非常時の印象をあらためて得られる程度であった。もちろんこれは農村部のフィジー人中心に接触していた当方の限られた経験から醸成された印象で、インド人など他の民族はまたちがった状況であったことは想像に難くない。



フィジーの少数民族カイ・ロマ。

比較の視座と近年の動向への着目

共同研究は、こうした個人的な経験を比較の視点から見直し、言語化したいという動機が出発点となっている。時代幅としては脱植民地期以降をおおまかに念頭に置いて、ことに2000年前後からの政治的不安定性の問題を直接現地で体験した研究者を中心に研究会を組織した。そのため、メンバーには、人類学者のみならずNGO関係者も招聘した。

近年、人間の安全保障や平和構築など、地域、研究分野に必ずしもとらわれない世界各地の政治的諸問題に対する理論的な研究がなされており、人類学の立場からもこうした諸問題にアプローチする研究が数多く生み出されている。本共同研究では、むしろ、紛争を当該地域の歴史的・社会的文脈に位置づけて、事例分析を積み重ねることで、理論と事例の落差を埋めると同時に、理論の可能性と限界を策定することをねらいとした。オセアニア地域の紛争は比較的近年の出来事でもあるため、こうした諸理論が新たに試される場であるからである。

ことにオセアニアにおいては、植民地時代の政治闘争以降の政治的に安定した時期を経て独立をはさみ、1990年代後半から、暴動、民族紛争、クーデタまでのさまざまな政治的問題が起きている。しかし、オセアニア地域の政治的不安定性に関わる諸問題をどう理解するか、あるいはそれらをどう記述・分析するかに関して総合的な見地からの研究は不足している。そこで、本研究ではそうした諸問題をひろく紛争としてとらえ、紛争とその処理及び常態への回復の

フィジーの国会議事堂。

様態について、比較民族誌的に検討することを通じて総合的な見地から見直しをはかると同時に、記述する側と対象社会の関係をも視野に組み込んだ新たな紛争の民族誌を案出することができたらと考えている。

今年度の活動と今後への期待

以上のようなもくろみを念頭に置きつつ、今年度、共同研究会を2回開催した。初回は「イノセンスの終焉にて──独立期以降のオセアニアにおける〈紛争〉の比較民族誌的研究にむけて」というタイトルのもと、研究代表者の丹羽が研究会の趣旨とオセアニアにおける紛争及びそれに関する先行研究の概況を説明した。

また、同時に、オセアニアと政治的安定性にかかわるデータ（チャート化したオセアニア各地の政治制度及び選挙制度、脱植民地化以降の政治的問題の年表）を整理しオセアニアの紛争に関する比較研究に資する土台を提示することで、目指される研究枠組みについて、各参加メンバーと方向確認・意見交換を図った。

この発表で、わたしがキーワードに採用した、イノセンスというのは、フィジー生まれのインド人歴史家、トンガ人政治家など、オセアニアにおける高名な人士が、2000年以降の生国の政治的混乱に際して、オセアニアをイノセンスな社会として捉えられる時代は終わったと口を揃えて語ったことに触発されたものである。オセアニアをコンセンサス重視型の平和的な諸社会と安易に等号で結びつける時代は終わったという認識を、彼らのような人びとが抱く時代になったのかと我流に解釈している。

第2回目は、オセアニアにおいて紛争を論じることの意義を、個別事例の研究に基づいて2名の方に報告して頂いた。上智大学の福武慎太郎は、「国民和解を想像する──東ティモールの紛争はどう理解されたか」というタイトルで、自身がNGO活動の立場からも関わった東ティモールの紛争後の平和構築の事例から報告をした。東ティモールは地理的には、パプアニューギニアと隣接する国で、国際政治の混乱に巻き込まれ、2002年までインドネシアの実質的支配を受けた地域である。独立をめぐる混乱時には、オーストラリア軍を主体とする多国籍軍が平和維持のため派遣された地域でもあり、国際関係論の見地からはオーストラリアとの関係が無視できないオセアニアにおいて紛争を考える際に「よき」先行事例となる。ことに、後年ソロモン諸島の政治的混乱を収束させるために派遣されたオーストラリア軍の活動の帰結と比較する上で重要である。本発表では紛争の経緯と、紛争後の平和構築に焦点が当てられた。

もうひとりの発表者は、大阪大学大学院生の豊平豪で、タイトルは「カイ・ロマ、フィジーのパートヨーロピアン──政治的動態の多面的理解に向けて」であった。扱っている紛争の事例は2000年以降のフィジーのクーデタであるが、本発表の特色は、少数民族の視点から政治的動態を読み解く試みがなされている点にある。フィジーの紛争研究においては、人口の多数派で2大民族集団である先住系フィジー人と移民の子孫であるインド人の双方の見解に着目されることが従来多かったため、本発表は先行研究の欠落を補う重要な情報を提示しているといえる。

研究会は、今年度始まったばかりであるが、今後も、事例研究を重ねていくことで、オセアニアにおける紛争及び紛争研究の特質を考察すると同時に、紛争の理論的研究と対質させることでより視野の広い共同研究にしていきたいと考えている。

にわ のりお

研究戦略センター助教。専門は社会人類学、オセアニア地域研究。著書に『脱伝統としての開発：フィジー・ラミ運動の歴史人類学』（明石書店 2009年）、論文に「紛争と政治的混乱：アフリカ化論の批判的検討を通じて」（日本オセアニア学会編『オセアニア学』京都大学学術出版会 2009年）、"Early Development of the Bula Tale Co-operative Group in Fiji Islands: Its Experimental Practice and Aftermath"（*People and Culture in Oceania* 21, 2005）など。